農業委員会だより

■発行人　飯山市農業委員会長　伊澤春一
■編　集　飯山市農業委員会　情報委員会

耕作放棄地対策への取り組みについて

「遊休農地解消シンポジウム」

2月5日に千曲市上山田文化会館で「遊休農地解消シンポジウム」が開催され、市農業委員も多数参加しました。

この中で、遊休農地を活用しての中学生の体験学習や家族向けの大豆の栽培体験イベントを開催(飯縄町)、新規就農者を受け入れた農地の利活用（松本市）、遊休水田で畜産飼料用の米栽培（信濃町）などの事例報告があり、続いて、早稲田大学の柏教授による「地域資源を生かした地域の発展」と題して講演が開催されました。

「耕作放棄地の活用策」

飯山市の具体的な耕作放棄地の活用面では、常盤堤外地に毎年春先に、地元の「花咲く会」が菜の花を咲かせたり、また今年度は新たに枝豆の栽培にも取り組みました。

市農業委員会でも、同じく菜の花の植栽に取り組んでおり、いずれも農地の有効活用や農村風景の創出に役立っています。

市議会産業建設委員会との懇談会（2月12日）

「耕作放棄地全体調査」

国では食料の安定供給を図るために優良農地を確保すると共に、耕作放棄地を解消することが必要であるとして、現在、全国的に都道府県・市町村と連携して調査を行っています。

北信州農業委員会協議会研修会（2月19日）

この調査は、①耕作放棄地の把握②解消計画の円滑な実施のために行っているもので、今後、市や農業委員会による一筆調査、現況調査、対策組織の結成などを行う予定です。

耕作放棄地の増大は、雑草や樹木が繁茂し、農地として再利用することが大変難しくなり、災害の原因にもなってしまいます。

今後、耕作放棄地の問題は全国的にも大きな課題となっていくと思われます。私たちも、身近な問題として対策を真剣に考えていく必要があります。

家族経営協定の締結数が134組に

2月末で飯山市の家族経営協定の締結数が134組となりました。

「我家の暮らしを楽しくするための協定」を農業委員自らも締結や見直しを重ねて、さらに取り組みを進めています。

家族経営協定は家族間のルールづくりを目指すもので、地域や家族の置かれた現状に応じた協定が望まれます。

まずは家族の就業・生活の課題や農業経営の計画を明らかにし、どんな暮らしがしたいのかなどを家族全員で話し合うことから始まります。

次に約束事を決めます。経営目標の共有のために合意すること。例えば家族の就農意欲の向上、家族経営で個人の立場（子育て中の母親や高齢者にも）を尊重し必要な協定事項の検討。

経営の体質改善のための簿記記帳青色申告への対応等の検討。

金融税制等の関連諸制度の研究など、家族が責任を持って行う事柄や評価（認め合うこと）など。

さらには暮らしを楽しむことや助け合うこと、社会参加や研修など自己を高めること。相続や介護などを盛り込んだ協定もあります。

そして協定が実行されているか点検と見直しも大切です。

家族経営協定は農家だけではなく、夫婦間や後継者と協定を結び、楽しく明るい暮らしができるようにしたいものです。

シラネアオイ

09.3
No.175

がんばってます！ GANBATTEMASU

―No.27―

「花は心の栄養」

梨元（なしもと） 茂（しげる） さん　大倉崎（常盤）

―経営内容は・・・

栽培面積は温室が40アール、露地が700アールです。切花を主に1年を通じて栽培しています。スズラン、ユリ、チューリップ、ナルコラン、ヒペリカムなどのほかに数十種類の宿根草や花木類を生産しています。

―花栽培を始めたきっかけは・・・

父の代から大規模に栽培を始め、自分が引き継いで現在に至っています。

―栽培スケジュールは・・・

スズランが1～5月、ユリが4～5月と8～12月、ワレモコウが7～10月、ナルコランが9月と2、3月など工夫しながら長期出荷を試みています。

―花栽培の経営形態は・・・

家族4人と、従業員・パートさんが4～8名ほど。出荷のピークは7～10月になります。

―花栽培に当たっての苦労は・・・

自然が相手ですので、夏場の高温旱魃（かんばつ）や大雨、台風などの自然災害に時に悩まされたり、最近の、燃料や肥料等生産資材のコストの上昇にも苦労しています。

―花の出荷方法は・・・

市場には、出荷用のダンボール箱、最近ではリユース可能なバケットでの輸送も増えてきました。

―花はどのようなルートで出荷されますか・・・

JAを通じて全国の生花市場、また個人的には、生花店や量販店、インターネットやDMを通じて個人のお客様にも販売したり、千曲川直売所やJAの産直コーナーにも置いていただいています。

―ネット販売の状況は・・・

ショッピングモールに店舗を開いています。毎回ご利用くださるリピート客も増え、新鮮で長持ちするとまずまずご好評いただいています。

―花にも流行があるのですか・・・

一輪でもゴージャス感のある花、例えばダリアなど今人気があります。また添え花は新規性の高いものは引き合いが強いようです。色はアースカラー、アンティーク調のものに特に人気があるようです。

チューリップ

―花栽培の今後の見込みは・・・

東南アジアや中南米など、常春の熱帯高地からの輸入が増えています。もともと栽培適地であることに加え、輸送や鮮度保持技術の向上などから品質的にも良いものとなり、国内市場を脅かしています。

―花栽培に携わって思うことは・・・

「花は心の栄養」。終戦後、食料難の時代に、あえて花を栽培した先人のひとりが遺した言葉です。この不景気の時代において、「花は嗜好品だから売れない」と言われることもありますが、このような時代だからこそ花を慈しむ心のゆとりをもってほしいと思います。

また、花を使うことは文化でもあります。子供の頃から花に親しみ、日常のなかに花を取り入れる「花育」が進められつつあります。そんな気持ちを大切にしていきたいと思います。

―農業行政について希望することは・・・

地域農業の担い手が急激に減少しており、若い人の就農人口不足は特に深刻ですが、都市部には就農を希望する若者も増えており、そのような意欲をもった若いエネルギーをすくい取れるような施策を希望します。

スズラン

現在、梨元さんはJAの青年部長も務め、多忙な毎日を送っています。大学を卒業してからオランダの球根研究所でユリやスイセンを研究（かき）し、また同時に最先端の花卉（かき）栽培を目にしてきたことで、広い視野と熱心な研究心で花の栽培に携わっていると感じました。冬とはいえ、ハウスのほんのり暖かい温度のなかで、いつか全国に出荷されて大勢の人の気持ちを和ませようとたくさんのスズランの花が咲いている姿が印象的でした。